

書評

書評 行龍著『走向田野与社会』(改訂版)

祁 建民*

本書は、中国における地域社会史研究の代表的研究者、山西大学中国社会史研究センター教授の著者による、近年中国社会史、特に地域社会史研究に関する論文集である。これは近年中国における地域社会史研究の領域で最も重要な研究成果の一つである。

1986年、馮爾康、喬志強などの第一世代学者が真っ先に社会史研究の必要性を唱えた。第一世代学者が中国における社会史研究を切り開き、そして次世代研究者の養成に熱心に励んだため、この30年間の中国における社会史研究は多くの業績を挙げた。馮爾康が率いる南開大学グループは宗族、医療史研究を中心とし、喬志強が率いる山西大学グループは地域社会史を中心として取り上げ、この二つの研究グループは学界で注目されている。その他、一貫して社会経済史を研究する華南学派は現代人類学の理論と手法を取り入れ、他の地域の研究者と共に中国における社会史研究を大いに推し進めた。著者は現代中国における社会史研究者の中の第二世代の中堅研究者として活躍している。2009年の『光明日報』には、趙世瑜、常建華、著者の代表的な研究者三人が30年間の中国における社会史研究を総括した三編の論文が掲載された。三論文では、中国における社会史研究の「多元・開放」的な現状をまとめ、今後の研究の方向や手法などを指摘した。

本書から30余年間の中国における社会史、特に地域社会史の研究状況とその変遷を知ることができる。本書は「理論と反省」、「水利社会」、「集団化時代」、「紳士商人と地方社会」及び「歴史の発見」の五つの論文群から構成されている。豊富な内容をもつ大著であり、限られた紙数でまとめることは容易ではないが、ひとまず内容を概観する。

まず、「理論と反省」の部分では、中国社会史研究の「多元・開放」的な現状を論じて、社会史研究における「かけら化」(碎片化)の問題を指摘した。この問題を解決するために、著者は三つの研究方法を提起した。即ち(1)全体の史観を提唱し、社会史だけでなく、政治史研究も必要である。(2)長周期の時間単位を設定し、研究する。古代史と近現代史との境界を取り除き、社会史研究は農村集団化時代まで延長し、現代社会史の研究を重視する。(3)リアルな立場に立ち、現実の社会と民衆に関心を払う。この三つの方法で研究を行えば、地域社会史は必ず「かけら化」に陥ることはない。これからの研究方法としては、「大きな伝統と小さな伝統」との関係を重視し、学際的な交流も重要である。地域社会史研究は、全体的な視野を持って、地域の特徴を重視し、新たな視点から地域社会を考え、地方文献の収集と整理に励んで、農村と社会の現地に目を向ける、など

*長崎県立大学国際社会学部教授

を指摘した。地域社会での経験と日常生活を観察することも必要である。従って、フィールド・ワークは最も重要だと唱えた。

著者が率いるグループは山西省を地域研究の対象としてきた。著者は山西省の特徴として、長所は石炭が多く、短所は水不足だと指摘した。水不足はこの内陸地域の発展を制限した。水資源は山西地域の社会生活の各側面に影響を与えた。水資源の種類とその開発方法は、社会組織、経済発展の水準、文化の発達状況などを左右してきた。また、水争が地域社会の権力構造や社会組織・制度にも大きな影響を与えた。さらに、水に関する地方色が非常に豊かである伝説、信仰と風俗文化も形成してきた。山西大学グループは山西水利社会史の研究を展開した。この研究のうち、著者による晋水流域36村の水利祭祀システムと晋水流域の環境・災害に関する研究が最も注目された。晋水流域36村の水利祭祀システムについては、水環境の変遷から晋祠の主神が三回変わったプロセスを明らかにし、宗教信仰と自然環境との関係を究明した。このような研究は近年社会文化史研究の新たな動きを表している。また、水母娘娘の祭祀から、村と村の間における水をめぐる争いについて分析し、民間宗教と社会権力構造及び産業の発展などを総合的に考察して、唯物史観に立って考えている。更に、「張郎」という伝説と信仰を分析し、水利集団間の競争関係を明らかにした。そして、晋水流域祭祀システムの研究によって国家と社会との複雑な関係を考察した。国家と社会との関係は簡単な対立或いは一致ではなく、互いに影響を与える、重層的関係があり、農村社会には多元的権力構造が存在している。晋水流域の環境・災害に関する研究では、長期間の晋水の灌漑と水利環境・災害の歴史をまとめた。晋水の開発によって、灌漑農業

及び水磨（水力で回す碾き臼）業、製紙業が発達したが、産業の発展によって人口が大幅に増え、用水量が拡大した。これによって、自然を過度に開発する事態を招き、その結果、自然生態が破壊され、災害が頻繁に発生し、水資源が枯渇してしまった。著者は人間と大自然との調和の重要性を繰り返して強調している。

抗日戦争時代から、山西省は一貫して中共の集団化のモデル地域である。集団化に関する先行研究はすでに多数の成果があったが、社会史の立場から「下から上へ」の研究はそれほど多くない。本書は政治或いは国家の政策の側面からだけではなく、社会変動の視点から山西省における集団化の歴史を考察した。「下から上へ」の研究とは、国家の政策とその実施プロセスだけではなく、農村社会及び農民生活の側面から、国家の政策がどのように受けとめられ、農民と国家との間でどのように互いに調整したか、という問題を中心とした研究である。そのために、山西大学研究グループは村レベル村落文書を大量に収集・整理し、聞き取り調査も行った。著者は集団化に関して、経験と教訓をまとめるような研究ではなく、長い歴史の立場から集団化の位置づけを明らかにしようと主張している。近代中国農村発展の客観的法則から集団化の背景、及び集団化によるその後の歴史に対する影響などを考えた。

著者は集団化に対して学際的な研究を行い、農村の各階層及び伝統社会、精神構造などが集団化時期にはどのように変化するか、という問題を改めて研究しようと提唱した。山西大学中国社会史研究センターは、大量の村落文書を所蔵するので、このような研究を実現する条件を備えている。

本書では、労働模範の李順達に関する研究によって、農村集団化の時代には個人、村落及び

国家の三者の相互関係を明らかにした。集団化時期でも、個人はある程度、自主的に選択でき、村は単純な国家権力の末端ではないことが指摘されている。これによって、今までの「上から下へ」という国家によって一方的に農村社会を全面支配する考え方を改め、研究方法を再検討しなければならない。張庄村に関する研究では、集団化時期の革命文化が農村の伝統文化に大きな影響をもたらした一方、農村社会の内部にも独自のメカニズムが働いていることが明らかになった。もし国家の政策と村のメカニズムとの間に矛盾が生じると、農民たちは両方に順応しなければならない。そのため、著者は農村社会における農民の精神構造とその行動パターンを研究することが必要であると提起した。また、本書に入れる剪子湾村と赤橋村についての調査報告書は、この二つの村の研究によって、国家、地域社会及び農民との相互関係を考察して、農村における「四清」運動と「文革」との内在的関連を明らかにした。

山西省は山西商人の発祥地であった。この商人グループ及びその金融・貿易活動についての研究は多数の業績が挙げられたが、幅広い社会構造を考慮した山西商人グループの研究、即ち商人グループと山西地域の社会構造との関係についての研究はこれまで稀である。著者は山西商人に関する研究を深めるために、他の地域の商人グループと比較して、山西商人の特有の社会背景を究明することを強調した。そのため、学際的総合研究フィールド・ワークが必要であると主張した。本書では、まず、近代山西商会と地域社会との研究について分析している。近代山西商会は自給自足の自然経済の土台の上で形成された。商業資本は流通領域に留まって、産業資本まで発展しなかった。その結果、商会の規模が拡大できず、他の地域と比べ

ると地方政治と社会生活への影響も弱かった。また、祁県と太谷県の秧歌についての研究によって、山西中部の地方社会と商人世界の状況を分析した。豊富な民俗資料を利用して、近代民衆社会の生活の実像に迫り、山西中部地域における社会の変遷の様子を細かく描いた。著者は喬志強の指導の下で、学界でいち早く劉大鵬の『退想齋日記』を発見・整理し、利用する研究者の一人である。この資料を利用して、劉大鵬の個人史を軸として、近代内陸部における一紳士の運命をまとめた。混乱する近代山西社会の中で劉大鵬は新たな社会に適応する成功者にならなかった。前近代の紳士の伝統を守って、その役割を果たし続けていたからである。近代以降、一部の郷紳は新時代で順応し、生まれ変わって新時代の風雲児になった。一方で、一部の郷紳は前近代の紳士の伝統をそのまま堅く守っていった。劉は後者の代表者の一人で、彼の人生は近代郷紳のもう一つの側面を如実に反映した。

地域社会史の研究には多くの地方文献の収集と解読が必要である。本書の「歴史の発見」の部分では、著者が画像、帳簿と村落文書を利用して、それぞれの視点から地域社会を詳しく考察している。その研究手法は斬新で評価できる。『晋察冀画報』の画像についての分析を通して、抗日根拠地の戦争、革命、生活の三大主題をめぐって、根拠地の状況を生き生きとして描いた。著者は画像に関する研究では、歴史学にとって、画像の色彩、構図、位置、変形などを分析することはもとより重要であるが、その内容、主題は更に重視しなければならないと強調した。『竹枝詞里的三晋社会』から、民間の歌謡に反映される近代山西の季節と節句、結婚式と葬儀、麻薬の蔓延、賭博の暴れ、女の嬰兒の間引きなどを分析して、近代山西社会の発展

と衰え、即ちその光と影の両面とも明らかにした。また、文水県の「昌玉公」商社の帳簿を整理して、近代民間商社の財務会計制度を丁寧に研究した。さらに、著者たちは山西大学中国社会史研究センターが所蔵する「集団化時期農村公文資料」を整理して、その膨大な資料の内容と価値を明らかにした。

以上のような成果をあげながらも幾つかの疑問点があるので、問題を整理してみよう。

まず、中国地域社会史研究における理論と概念の問題である。中国の伝統史学は政治史を中心とし、社会史を研究する際には、社会学、人類学など多くの社会科学の理論と概念を取り入れた。しかし、このような理論と概念が中国社会の実情と合致するか否かを再検証する必要がある。著者は「国家と市民社会」、「思想と社会」、「法律と社会」の理論及びアナル学派の観点を論じて、中国社会史研究にとって、その有効性を考えている。しかし、中国の地域社会史研究には、中国伝統社会の実情に合致する概念、言説を新たに創出しなければならない。

次に、中国水利社会史研究については、本書では水利社会史の内容と研究手法が提起され、水利灌漑と産業及び環境との関係を論じられているが、現在水利社会史研究の立場を根本的に転換する必要がある。今までの「水利」に関する研究は、殆ど大自然から水を利用して、「富」を取る方法、及びそれによって形成された法律・慣行を中心として研究されてきた。従って、人間の「水利」活動による水資源の破壊についてはあまり検討されてこなかったと言わざるを得ない。いうまでもなく水資源の破壊は環境問題であり、水をめぐる環境の研究は長期間の変遷過程を考察することが必要である。例えば山西省中部の晋水流域における水資源、人口、環境の三者の相互関係を千年単位に広げ、

この地域における環境と産業構造及び宗教信仰の相互影響の歴史を、その長期的時間空間の中で考察しなければならない。

第三には、村落文書の整理と収集におけるプライバシー問題である。著者をはじめとする山西大学研究グループは大量の村落文書を発見・整理・利用した。これは大きな貢献と言える。現在学界の全体では、村落に残存する文書の価値はまだ十分に認識されていない。農村部の近代化が進むと伴に散在する地方文献が消え続けている。その文献資料の収集と整理は急務である。しかし、村落文書の中には、村民の家族・親戚関係、宗教信仰、窃盗、不倫、密告などの内容が含まれ、個人のプライバシーに関わるものが多数存在している。その当事者が存命或いは彼らの子孫が今も村で生活しているため、このような資料を閲覧し、利用するには学術倫理面での配慮をしなければならない。

以上勝手なことを述べたが、本書は中国史研究者に限らず、多くの地域社会史研究者に読んでいただきたい研究書であると確信している。

〔(中国)生活・読書・新知三聯出版社・2015年・544頁〕